

わがまち自慢 ～市長室から～

まつえ
島根県松江市
まつうら まさたか
松浦 正敬 市長



八雲が愛した 松江の人々の精神性

松江市は、昭和26年(1951年)に奈良市・京都市と並ぶ「国際文化観光都市」に制定され、一昨年には開府400年を迎えるなど、歴史資産の豊かな都市です。特筆すべきは、市民の生活の中にも、不昧流^{ふまいりゅう}などの茶の湯文化が浸透しているなど、歴史と文化が日常の一部となっているところでもあります。

文豪として知られる小泉八雲は、明治23年(1890年)に来日し、松江では英語教師も務めました。八雲は松江の落ち着きや佇まいにとても感動し、日本らしい景観と文化を「古い絵巻物」と記す一方、新しいものを受け止めていく姿勢にも松江らしさを見ています。

松江人には古いものを守りながら、新しいものを受け入れていく精神性があり、それは、自らの地域への愛着の強さの賜物ともいえます。

昨年度から、「縁雫」という観光プログラムを実施しています。これは、雨の多い松江だからこそ、しっとりと落ち着いた風情を楽しんでもらおうという「逆転」の発想によるアイデアと、松江市立女子高等学校の生徒による「松江大好き」という思いが結実したものです。

この松江ならではのプログラムに、

市民の皆さんも賛同してくださり、「縁雫カクテル」や「和傘に似せた傘の貸し出し」などで盛り上げていただいています。この取り組みに対して、国連ハビタット福岡本部(アジア太平洋担当)から「2013アジア都市景観賞」をいただきました。光栄なことに、ソフト事業では初めてだそうです。

本場志向。 はばたく松江ブランド

江戸時代から続く松江の特産品には、トビウオを使った「あご野焼き」や「畑^{はた}の干し柿」があります。これらは現代に至るまで市民に親しまれ続け、「本場の本物」というブランド認定を受けています。

こうした伝統的な製品のほかにも、柿やイワガキ、シジミ、セイゴ(ズキの若魚)など、地元の産品にこだわった農産物や海産物を活用した新たなブランドづくりや商品開発も活発で、農水工商連携事業として産学官が一体となって取り組んでいます。

地域産品づくりのほかにも、「Ruby City MATSUEプロジェクト」という松江にしかできないIT産業の振興策に取り組んでいます。無料でダウンロードできるプログラミング言語「Ruby」は、松江在住のまつもとゆきひろさんが開発しました。これを契機として、平成18年に『松江オープンソースラボ(松江市開発交流プラザ)』を設置しました。その結果、国内のみならず海外から多くの人々が訪れていたくようになり、松江を「Ruby」のメ

ッカにしようと、様々な産学官連携で「Ruby」の普及に努めています。他にもまねができない「IT産業のまち」として、「Ruby」を地域ブランドとして育てていこうという取り組みです。

「共創のまちづくり」が 基本姿勢

これまで、力を入れてきた施策の成果として、例えば福祉分野では、おかげさまで、2013年度の合計特殊出生率は、全国平均1.41に対して1.61となり、待機児童数はゼロとなりました。医療費の無料化対象年齢を上げるなどの子育て支援を充実させており、2008年の「日経新聞行政サービス調査」では、全国3位の評価をいただいています。

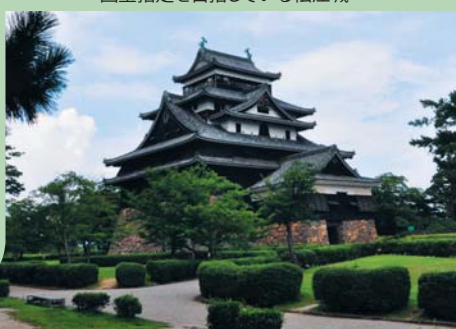
このような成果や、松江が持つ歴史文化、産業などを最大限に活かしながら育てつつ、将来につなげていくため、今、「共創のまちづくり」を市政の基本姿勢として提起させていただいています。いろいろな分野の市民のつながりや組み合わせで、新しいものを生み出そうという考え方です。

ご紹介した様々な取り組みも、「共創のまちづくり」を前提に取り組んでおり、今後とも、市民の皆さんとともに、八雲が愛した松江の魅力をさらに高めていきたいと思っています。(談)



縁雫。松江市立女子高等学校が2012年度の「観光甲子園」主催・神戸夙川学院大学で文部科学大臣賞を受賞したことが契機になった

一昨年、築城年がわかる祈禱札が見つかり、国宝指定を目指している松江城



松江オープンソースラボでの「中学生Ruby教室」。毎年「Ruby」の国際会議を行っており、昨年「Ruby Prize」を創設して、これからの人々を顕彰している

